

大分市の図書館事情今昔

栗屋 文世

大分市の公共図書館サービスは昭和 48 年から市内各所を移動図書館車で巡回することから始まりました。しかし、大分市としての図書館がなく、読書グループを中心とした団体等から市立図書館をという機運の元に、昭和 61 年、文化ホールや体育室その他の施設を備えた複合施設コンパルホールの中に、コンパルホール市民図書館（図書室）という位置づけで設置されました。最近の公共図書館では当たり前とされている休日・祝日開館や午前 9 時から午後 9 時までの長時間開館は、その当時の図書館運営としては、時代のトップランナーとして全国的にも珍しく、視察や人事管理(ローテーション勤務)の問い合わせが多かったことを思い出します。さらに県下の公共図書館で初めて導入した図書館コンピュータシステムは、今までの作業と比較すると貸出・返却・予約などのカウンターサービスを効率化し、提供するサービスのすべてが画期的なものでした。

図書館サービスの原点である「いつでも どこでも だれにでも」をモットーに、開館以前からの 134 箇所のステーションを巡回する移動図書館車のサービスも継続し、さらに複合施設を利用した講演会や読書感想画コンクール等、数え切れないほど事業の展開をするなどの多面的な活動は今も継続しておこなっています。市内には先輩格の大分県立図書館が存在していたこともあり、複合施設の中では蔵書数、床面積や資料提供などのハード面では限界があることを痛感し、図書館事業には特に力を入れ、ソフト面での充実を図る努力をしてきました。

この図書館事業展開の考え方については、様々な文化の先進地でもあり、利用率全国 2 位（1995 年）の金沢市の図書館の事業展開の考え方である『双方向からの情報発信』を見習いながら、職員でアイデアを出し合い創意工夫を重ねたものを市民に提供し、このことを今でも事業のありかたの基盤として考えています。簡単に表現するならば、事業に関して「図書館がそこまでやるのか」「そんなことも図書館が」というようなことでしょうか。これは最近の図書館でよく言われる「～支援」等の考え方にもつながるものがあるように思えます。しかし、このような図書館運営は異動で図書館に勤務するのが初めての職員には“図書館は本を貸すところ”というイメージはあっても“事業をするところ”という認識は薄く容易に理解できない感があったことも否めません。

図書館事業だけでなく、図書館はサービス業であることを理解し、それが実感として身に付くには時間のかかることでもあります。これまで、図書館業務に関わってきたものとして、単純に見えるカウンター業務についても「カウンターは檜舞台、カウンターこそ自分らしさを一番出せるところ」「フロアワーク（配架だけではありませんが、本を知ること）はカウンター業務の 7 割を占める」「図書館の職員は本と利用者をつなぐ役割がある」と表現しながら、カウンターの大切さを説いてきましたが、現実には「図書館の仕事は行政

の中でも特殊」「カウンターは単純作業だから誰にでもできる」「仕事は事務室で」という声も聞こえてきます。実際、はたから見るとアカデミックに感じられる図書館業務も意外と肉体労働(?)ですし、言うまでもなく一冊の本が利用者に届くまでには何段階も手順があり、職員の手を通っていく業務の一つ一つがその図書館のサービスのレベルに結びついています。通常の行政サービスとは異なり、トラブルさえ起きなければ、それでサービスが十分にできているのではないということを理解して欲しいと願っています。図書館サービスとは、もっと究極に考えて大分市民に必要な図書館サービスとは、ということを考えるとき、市民の要求をカウンターで肌で感じて、初めて自分なりの結論が醸成され、的確で質の高いサービスが提供できるのではないかと考えています。私自身は「図書館は未知な部分に触れ、世界を広げられる場所、本を借りるだけでなく、何かないかなど好奇心を持って足を運んでもらえる図書館でありたい」と願い、望むもの(資料)がないときは他の資料を、利用者が手ぶらでは帰らないような、できるだけサービスをしたいと心がけているところです。

開館から20余年、当時の大分市民図書館のサービスは全国の注目を集め、時代の図書館としての役目もある程度は果たしてきました。最近では公共図書館に求められる役割や経営方法も指定管理者や業務委託など変わってきています。大分市の図書館行政も時勢に対応するためにはこれまでの図書館にありがちな貸し出し中心のコンセプトから、21世紀の高度情報化時代と市民ニーズに合わせた「役に立つ図書館」への変容と進化が必要です。環境・エコロジーや健康などを考えた事業の実施という小さな枠でなく大局的な視点を持った図書館経営が求められるでしょう。

数年後には、大分駅南側に建設される「複合文化交流施設」にも図書館が設置される予定です。新しくできる予定の図書館は面積も広く、設備面においても整備されることはもちろん、事業展開だけでなく、映像配信や郷土資料・地域資料のアーカイブ化など、収集する資料や設備機器、運営なども新しい時代の図書館として市民ニーズに十分応えることが期待できる図書館となると思われます。現コンパルホールの図書館は学校図書館との連携や市内の地区公民館とのネットワークの基点として放射状のサービスをめざし、新図書館はこれまで十分とはいえなかったレファレンス機能の充実をはじめ、前述のように様々な機能を持つ集客未来型の図書館として、それぞれの館の特徴を活かしながら、2館の相乗効果を発揮し大分駅を中心とした文化と情報の発信基地としての大分市の顔となることでしょう。

図書館司書として、コンパルホールの大分市民図書館、新図書館と人生の中で図書館建設に二回もかわり、「夢」を見ることができたことを幸せに感じるとともに、完成が楽しみです。

(くりや・ふみよ 大分市民図書館)